

通巻第600号

記念特別号



題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」

発行所

公益財団法人 友愛

〒112-0002
東京都文京区小石川
1-10-13 小石川文ビル2階

TEL: 03-5684-3188

FAX: 03-5684-3186

E-Mail: you-i@yuai-love.com

https://yuai-love.com

編集人：羽中田元美

隔月1回 10日発行

会費(4月~3月)

個人/3,000円以上

法人/10,000円以上

今こそ「友愛」の世界を

理事長 鳩山由紀夫

機関紙「友愛」が600号を迎えたことに対し、今まで「友愛」を育ててくださった多くの先達や仲間の方々に心から感謝を申し上げます。

『友愛』の創刊は昭和28年、「相互尊重・相互理解・相互扶助」の友愛理念を掲げた祖父一郎が立ち上げた友愛青年同志会の機関紙としてでした。あれから73年、政治的結社として出発した同志会は、今では政治的に中立な公益財団法人友愛として、いまだに微々たるものではあります。世界に友愛の理念を広めるべく活動をしていきます。

その機関紙「友愛」創刊500号は、偶然にも17年前の私の内閣が誕生した時に当たっていました。創刊500号に対して、様々な方々からお祝いのメッセージが届けられていました。中でも10年前に他界した元理事長でもあった弟邦夫の文章には苦笑せざるを得ません。彼曰く、「兄弟そろって、



機関紙「友愛」創刊号



機関紙「友愛」100号



機関紙「友愛」200号



機関紙「友愛」300号



機関紙「友愛」400号



機関紙「友愛」500号

友愛を政治利用し過ぎてきたことは率直に反省すべきであろう。つまり、「友愛は政治運動ではない。友愛は理念であり共生の哲学である」ということです。私自身は友愛を政治利用しているつもりは無かったのですが、壇上で友愛を語るたびにヤジが飛んできていたのは、友愛を政治利用するなどの批判だったのでしょうか。弟は最後に、「兄弟の最大の責務は、与野党の壁を乗り越えて、友愛社会に共闘し、それを実践することに違いない」と結んでいます。が、現在の最大の問題は、

与野党揃って友愛を語る者がいなくなってしまうことではないでしょうか。目を外に転じますと、ウクライナ戦争は未だに終息していませんし、イスラエルによるガザでのジェノサイド、更にはイスラエルと米国によるイラン攻撃でも多くの命が奪われています。もし指導者たちに「相互尊重・相互理解・相互扶助」の友愛精神があれば、決してこのような悲劇は生まれないはずだと。とくに米国のトランプ大統領には武力行使を禁止する国際法の原則を守らうとする意志が全く見られません。それにも拘らず、日本政府は米国の国際法違反を咎めることができないどころか、高市首相に至っては、「世界に平和と繁栄をもたらせるのはドナルドだけだ」と、トランプ大統領に媚びるありさまで。世界に力による平和どころか、本

来ならば米国とイランの両国と良好な関係を築いている日本が、友愛精神を発揮して真の平和に向けて積極的に動くべきですが、そのような努力も見られないことは残念です。これは友愛が政治利用されるか否か以前の問題です。畢竟、私も公益財団法人友愛の活動が未だに多くの人々の間に認知されていないことを反省しなければなりません。自分たちの活動が自己満足に終わっていないか、マンネリ化しているのではないか。例えば国際交流事業の対象国は、かつては中国とベトナムであったが、最近では韓国やミャンマーとなってきた。友愛が、それで良いのか。友愛の理念を海外の若者たちに理解してもらうための小論文コンテストは、AIの時代にどのような意味を持つのか。海外以上に、そもそも日本人の間に友愛を広める活動が不足しているの

ではないかなど、検討課題は尽きません。その時、救いになるのは友愛を理解する若者たちが育ってきていることです。OEJAB等への派遣事業を経験した若者たちが中心になって友愛ユニオンを作り、その後の友愛活動に協力してくれています。また、二十年近く前に実施した友愛塾で育った若者たちの中に、友愛財団で中心的な役割を果たしてくれている者もいます。友愛理念の浸透発展という意味では、友愛塾の再開も視野に入れるべきかもしれません。彼らの、しがらみに囚われない新しい提案をできる限り生かして、公益財団法人友愛が世界平和にもっと積極的な役割を果たすことが出来るように発展させていきたいと願ってやみません。

今こそ友愛の世界を創る一歩を踏み出そうではありませんか。

▼六〇〇号記念号という節目に当たり、過去の時評を振り返ってみました。▼時事問題を身近なことから結びつけながら書く、というスタイルを心がけているが、筆者の専門領域である国際問題や政治情勢がメインテーマとなることが多い。「身近なこと」の方は読み返すと「そんなこともあったなあ」と感慨に浸りつつも忘れていた程度の話が多いが、(大学)教育の現場とか震災・復興関連のネタは定番となっている。▼生来の遅筆(というか怠け者)のようで、今回の時評も切を徒過し迷惑をかけている。まあ、英語でも「究極のインスピレーション」はメロウな表現が少なく知られているようなので、そこは何かとご寛恕いただきたい。……というのはいつもこの言い訳なのだが、原稿が世に出るためには待つてくれる編集者も必要で、これまで辛抱強くお付き合いいただいていた羽中田事務局長には感謝しかない。▼一般紙でもなく、ましてや時評まで読んでいただいている方々はさらに少ないだろうし、また誰が書いているかを知らない方がほとんどだろうが、それでも時々感想をいただく場合もある。こそばゆくも嬉しいものである。▼筆者による執筆は十五年目に入る。とはいえ、まだ総数八〇本足らずで、改めて友愛運動と本紙の長年の蓄積を感じて不安もよぎる年齢に差し掛かっているが、戦争と格差社会に暗澹たる思いを抱く中、より良い未来を次世代に残すべく微力を尽くしたいと思いを新たにしている。(筆者と友愛の関わりについても記したいことはなお数多あるが、五六一号、五八四号の時評も参照願いたい。)(ヒゲ)

友愛時評

機関紙『友愛』通巻600号記念特集 ～読者からの声～

機関紙『友愛』通巻600号によせて
全国の読者から寄せられた友愛のこころ

機関紙『友愛』第600号発行にあたり、読者の皆さまに「ひとことメッセージ」をお願いしました。沢山の方々から、熱いメッセージをいただきました。ありがとうございます。ここに関連写真を添えて、ご紹介させていただきます。

＝ 掲載順不同 ＝

600号を記念して

川手正一郎

公益財団法人友愛／前常務理事

友愛(友愛青年同志会)創立時(1953年)、私は第1号会員として入会しました。今でもはつきり覚えてます。結成大会は日比谷公会堂で行われ、小生も手伝いとして参加し、第1号会員として登録、署名した時の高揚感、今でも忘れません。

私は山梨の農村から東京に出てきて、見るもの聞くもの常に新鮮、東京は田舎者にとっては天国のような感じでした。

友愛に入会したのも、田舎者が少しでも何か行動を起こしたいという小生の夢の実現の第一歩のように思っていました。そして何をやるにも大きな未来に挑戦する精神でした。

鳩山一郎先生のお話が伺える、戦後の貧しさのなかで、薫先生が用意してくださるお菓子や食事がありつける、どちらにもワクワクしながら、音羽御殿の坂道を何度上ったこととでしょう。当時の仲間と一緒に手さぐりで作り上げた機関紙『友愛』が600号になるとは、まさに夢のような刻の流れを感じます。そして、小生が友愛に入会してから、もう73年にもなったのかと驚くと同時に、時代の速さと変化を痛感します。

友愛に入会したことで、小生の人生はあらゆる面で磨かれた感じます。田舎者が人間として成長できたのは友愛に入会し、友愛運動に熱中したおかげだと思います。音羽の三羽ガラスと言われるながら一緒に活動した、鶴さん(鶴巻克雄)奥田さん(奥田吉郎)も、鬼籍に入りました。私も既に93歳となりましたが、これからの社会のために何ができるか、そんな考えをベースに生きて、自身を磨いて生きる覚悟です。

時々私の「友愛とは何か」と想いを巡らせます。「私にとって友愛とは」です。生涯を貫いて友愛と共に生きることを決めていた先輩の言葉として、ここに残したいと思えます。友愛のベースは愛、利他です。そして自分の心を磨くことです。人間が人間として生きること。争わないこと。生きていくことに感謝すること。常に笑顔で人に接すること。いつもそう思って、これからは友愛は天運と信じ、ともに生きる責任を全うします。



友愛創立65周年記念式典にて 60年を経てなお熱く「友愛」を語る川手正一郎氏



「三羽ガラス」と呼ばれた三人。(友愛クラブ懇親旅行にて)左から鶴巻克雄、川手正一郎、奥田吉郎の三氏



「友愛青年同志会」の旗。この旗のもと、多くの若者が集い巣立っていった

「友愛政治家」研究の重要性

中島政希

公益財団法人友愛／理事・元衆議院議員・政党政治研究所主宰

「友愛運動の展望」について考えたとき、私が懸念しているのは、友愛思想の実践者であった鳩山一郎について、研究者の層が、同時代の吉田茂や石橋湛山と比較して極めて薄いということだ。近年石橋の「小日本主義」へ関心は極めて高く、関連本の刊行が相次ぎ、国会には超党派の石橋湛山思想研究連連である。他方鳩山の伝記や研究書はほとんどない。政治思想は政治家によって体现され、世に広められるものである以上、友愛思想の体现者たる鳩山一郎とその継承者である鳩山由紀夫元首相への関心と共感が広まらなければ、日本の友愛思想自体が忘れ去られてしまう恐れがある。新世代の研究



中島政希理事

『鳩山一郎とその時代』平凡社刊 監修：中島政希・増田 弘

究者の育成が重要だ。理事として私に出来ることがあるとすればこの点だろうと考え、就任以来、若い政治学者たちに説いて共に研究を進め、これまで「鳩山一郎とその時代」(令和三年)「戦後保守政治家の群像」(令和五年)「民主党史」(令和八年)などを刊行してきた。これらの書物は幸い好評を博したが、未だ吉田茂研究や石橋湛山研究に追い付くまでには至っていない。

い。私は健康の許す限り、今後とも「友愛政治家」研究の発展のために努力したいと思う。

軽井沢友愛山荘

中村智彦

神戸国際大学／経済学部教授

二十年前ほど前、財団のお仕事を手伝ったことをきっかけに、軽井沢の友愛山荘を利用させていただくようになりました。夏の大阪は暑く、その暑さをしのぐため、数年にわたり軽井沢の友愛山荘へ避暑に出かけるのが、わが家の夏の恒例となりました。

毎年顔を合わせるご家族とも次第に顔なじみとなり、挨拶を交わしたり、言葉交わしたりすることも楽しみの一つでした。夏の軽井沢は多くの人で賑わっていましたが、それでも今に比べると、どこか落ち着いた雰囲気があったように思います。滞在中は山荘の周辺を散策し、当時あった古書店で、別荘地ならではの書籍に出会うこともできました。

子どもたちは、山荘の広々とした庭を元気いっぱいに走り回っていました。幼稚園から小学校低学年まで、毎年夏に訪れていた娘は、成人してからは、山荘の広々とした庭を元気いっぱいに走り回っていました。



全国各地の友愛山荘は、日本におけるユースホステルの先駆者的存在だった。軽井沢友愛山荘は、最後まで運営を続けていた。合宿、家族旅行と多くの方に愛され、惜しまれつつ幕を閉じた

「友愛」発刊600号にあたり

吉澤大淳

日本蘇領研究会会長・日展特別会員・日本ペンクラブ会員

私は長年日中文化交流に努めてまいりました。1994年、長野県下諏訪町に、中国北宋時代の蘇頌らが開発した天文機器である水運儀象台の復元を提案しました。実物大の復元模型は日本全国の匠の手で1997年に完成し、「精密さは世界一」との学術界からの賛辞も頂きました。

この水運儀象台の復元に関する記事が貴機関紙『友愛』に連載されたことをきっかけに、私は「友愛」の会員となるご縁を頂きました。この度、「友愛」発刊600号にあたり、世界親善に多大な貢献をなさった「友愛」に心より敬意を表するとともに、いよいよのご発展をお祈りいたします。



「愛」 吉澤大淳書 日展特別会員 日本ペンクラブ会員

機関紙『友愛』通巻600号記念特集 ～読者からの声～

「友愛の精神に寄せて」
原点に立ち返って

谷藤悦史

公益財団法人友愛/理事・
早稲田大学名誉教授

主権国家の平等、領土保全、政治的独立の尊重を原則として作られた国際法と国際秩序が、崩壊の危機にある。自由民主主義を標榜しながらそれを棄損する権威主義的ポピュリズムの台頭がその背景にある。自由民主主義の危機でもある。何が生じているのか。現代における「共感」の衰退である。

近代啓蒙思想は、世俗的・宗教的権威に隷属しない「自立した人間」の「協働」の作業によって社会を形成するという考えがある。人間は「理性」と「共感」を備えているから、自立した「自由」と「協働」の思考と行動によって、調和した自立的生活が可能になると考えるのである。こうして「自由」と「共感」そしてまたその均衡が、至高のものとして位置づけられた。

一部の人や国家の「自由」の最大化は、他者の「自由」を棄損する。それを回避するために、他者や他国への「共感」による「抑制」が必要である。自分や自国の「自由」だけを最大化して追求するポピュリズムは、この原則と相いれない。社会に「共感」を内在化して、様々な生活の場面で実現する作業を進めよう。「共感」の再生、「友愛」の再生でもある。600号はその起点である。

私の青春「友愛」

萩原直三

公益財団法人友愛/評議員・
元友愛青年連盟委員長

ふとしたご縁を頂いて、音羽の坂を登ったのは、昭和42年の11月の末で、小生、二十歳の時でした。今思

えば、カレルギー伯のご来日の直後で、やけに慌ただしかったような気がします。

当時は「友愛青年同志会」という名称で、例の「半地下室」(現鳩山会館事務所・写真下)に本部がありました。会長は薫先生で、常に凛とした佇まいで、もちろん遠くからお姿を拝するだけでした。

会員となつて、先輩方に言われるままに連日参りますと、その「ベテラン(猛者)」方の議論で、狭い半地下室は熱気に包まれていました。

さしたる志も無いままの小生などは、雑用係の傍ら、「離れ」で、深津栄一先生や奥田吉郎、川手正一郎、鶴巻克雄、渡辺昇ほか草創期の「大先輩方」による、「友愛とは」という講義を折に触れて受けておりました。

はじめは我慢もできたのですが、その約2時間は(睡魔との闘い?も)あり、かなり難儀で、正直なところ「厄介なところに来ちゃったなあ」という実に不謹慎な思いでおりました。



友愛青年同志会35歳引退制度を受けて発足した「友愛クラブ」。毎月1回の勉強会を約半世紀に亘って続けてきた。この写真は、500回記念(2012年9月12日)の折りに撮影されたもの。黎明期に活躍された方々の顔が並ぶ。友愛活動の一つの歴史であるといえる



同期の絆

佐々木菜穂子

鳩山友愛塾第一期修了生

た。時折、渡部恒三先生、政治評論家の飯島清先生、ブライダルの桂由美先生などもお見受けしました。具体的な実践運動の中では尾形智矩、早川広中、佐々木恵美子、長田正太郎などの先輩方のご指導を頂きました。

その過程で学んだ「相互尊重・相互理解・相互扶助」の「友愛の理念(精神)」は、私の「心の柱」です。

ともあれ、例えば「西ドイツ」派遣(昭和51年・日独青年交流)。日中平和友好条約締結直後、中日友好協会からの招請で日本初の青年団体として訪中(昭和53年・団長は邦夫先生)は忘れ難い経験でした。他には、東南アジアの青年との交流、鳩山杯争奪全日本英語弁論大会、文部大臣杯日本語弁論大会、友愛社会開発セミナーの開催、核禁会議や尾崎行雄記念財団との連携等々を含め、全国各支部の同志と共に活動したことは大変貴重なことでした。

後に、友愛クラブ(約半世紀続いた、友愛OBの勉強会)にも入れていただき、各界の第一人者の方々の卓話も拝聴できました。それらを思い、併せて「友愛」が作ってくれた人々との繋がりも思うと、それだけで懐かしさと感謝で溢れます。傘寿となつて振り返れば、音羽の坂を登つて60年。「友愛」は、小生の青春であり、人生そのものになつています。その機関紙「友愛」が600号を迎えるとは、驚きと、喜びと、感慨と、長生きしたご褒美でしょうか。

700号、1000号を目指して羽ばたけと、心よりのエールを送ります。



2008年4月にスタートした「鳩山友愛塾」。参議院議員、市議会議員、市長を輩出。公益財団法人友愛の理事として活躍している方も多

食後は公園を散策しながら、ベンチでも時を忘れて語り合いました。社会問題や女性の生き方、表現方法など話は尽きません。自分の考えをストリートに伝えるのは新鮮な気持ち

ちでした。友愛塾で共に学んだ友人の大切さを改めて感じました。小説は道半ばですが、風力発電の折れた羽根、米騒動、熊被害などの地域課題を扱った短編という私のスタイルが見えてきました。今後も友愛を忘れず、己を磨き続けたいと思います。

編集長時代の思い出

齋藤 實

元機関紙「友愛」編集長

私は機関紙「友愛」188号から232号まで編集長を担当した齋藤実(89歳)です。

友愛青年同志会時代で、故尾形智矩幹事長の下、早川、森、瓦、越川、佐々木、鶴巻の諸兄弟等と執行部を構成していました。昭和46年の夏休みを利用して軽井沢で避暑中の顧問で民法学者の我妻栄先生の別荘を、当時友愛山荘の支配人を担当しておられた故三浦満君と訪問し、二時間近く対談した貴重な思い出がある。その対談の内容は、第223号に掲載しました。「友愛」縮刷版(HPに掲載)をご覧ください。

またシユバイツァー病院に勤務し、シユバイツァー博士と親交のあった故高橋功博士等と、軽井沢友愛山荘で「夏の平和大学」を開講し、おりしも来日予定の1958年度のノーベル平和賞受賞者のペール・ピエール博士の「友愛の対話」思想をテーマに取り上げた講座は、時機を得て好評を博しました。昭和42年12月、クーデンホーフ・カレルギー博士の来日の折には、鹿島平和研究所、NHK、友愛青年同志会三者で担当した各種の行事を開催し、内外に平和の力を強く印象づける事がで

きました。昭和43年の友愛運動15周年記念には、中央教育指導部長故鶴巻克雄君と共に、故深津栄一先生の執筆による「友愛の理論と実践」と題した学習シリーズを発行できたのも、貴重な思い出です。

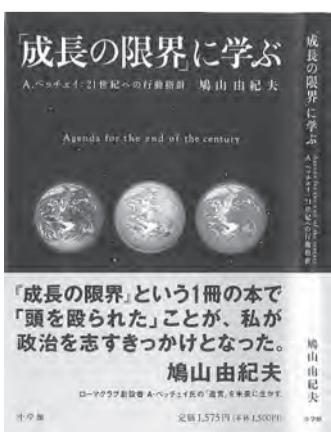
『成長の限界』に学ぶ

芳賀大輔

公益財団法人友愛/理事

42年前に亡くなったローマクラブの主宰者として『成長の限界』を世に問うたA・ペッチェイ氏は、その遺言で、「新たなハイテクノロジ」が「良いことにも悪いことにも使える、度を越した力」を人類に与える」と警告し、そして、「その力が有益となるか有害となるかは、「人間がそれにふさわしく成長できるか否かにかかっている」と述べています。この指摘は、技術そのものの優劣ではなく、それを扱う人間の成熟度が決定的だという洞察に立っています。

今日、AIやバイオテクノロジー、軍事技術などは、地球規模の課題解決に貢献し得る一方で、監視や分断、暴力の手段ともなり得ます。その岐路において求められるのは、友愛の思想に根ざした人間の内面的成長ではないでしょうか。友愛とは、他者を利用の対象ではなく、尊敬をもつ「共に生きる存在」として受け



「成長の限界」に学ぶ 鳩山由紀夫著 小学館刊 写真と文字で解く成長の限界 独自の視線が鮮やかに記されている

機関紙『友愛』通巻600号記念特集 ～読者からの声～

とめる姿勢です。この視点に立つとき、技術の目的は、競争に勝つことではなく、いのちと地球という共同体を守り育てることへと方向づけられます。ペッチェイ氏の遺言は、技術の時代を生きる私たちに、「どのような人間観と友愛の倫理を育むのか」という、避けて通れない課題を突きつけており、我々もまた、微力とはいえ、友愛を「絵空事にしない」行動をするという強い使命感を持たなければと実感しています。

600号によせて

後藤大智

公益財団法人友愛/理事・友愛ユニオン

600号記念おめでとうございませう。2019年、大学3年生の時にオーストリア・OEJAB派遣プログラムに参加する機会をいただきました。政治学徒だった私にとって移民政策や福祉事業、国際平和への取り組みに触れたことは大きな意義があり、国際交流が人の成長にとって大きな力を持つことを実感しました。

その後ご縁をいただき、2023年より最年少の理事として各種事業の推進に携わっています。かつて支えていただいた立場から、今度は財団を支える立場へ；その責任の重さを日々かみしめています。友愛の活動は、若者の可能性を広げ、次代を担う人材を育てる確かな力を持っています。事実、各種事業に参加した若い世代が事業参加後も集まり、友愛を基盤に新たなチャレンジも始めています。今後も理事として若い世代をリードし、先輩方の皆様からバトンを受け取り、さらに次の世代へと繋いでいけるよう、引き続き精一杯貢献してまいります。



友愛ユニオンメンバーが「私にとって友愛とは」をスピーチ。司会進行を務める後藤理事(右端)写真左から、森崎桃子評議員、巴上小楽咲さん、藤田脩椰さん、土屋京香さん

の推進に携わっています。かつて支えていただいた立場から、今度は財団を支える立場へ；その責任の重さを日々かみしめています。友愛の活動は、若者の可能性を広げ、次代を担う人材を育てる確かな力を持っています。事実、各種事業に参加した若い世代が事業参加後も集まり、友愛を基盤に新たなチャレンジも始めています。今後も理事として若い世代をリードし、先輩方の皆様からバトンを受け取り、さらに次の世代へと繋いでいけるよう、引き続き精一杯貢献してまいります。

蒙を啓かれる経験

藤田脩椰

友愛ユニオン

友愛に関わり始めてからおよそ4年、私にとって友愛は、穏やかでありながらも非常に刺激に満ちた場でした。また、友愛を通じて知り合った、国籍・世代・職業の枠を超えた様々な方々との交流を通じ、蒙を啓かれる貴重な経験をいただきました。特に印象的だったエピソードを2つご紹介したいと思います。

1つ目は、OEJABとの交流です。オーストリアへの派遣経験後、同国の学生の訪日を受け入れる機会があり、私もアテンドのお手伝いをしました。多くの方々の協力を得、無事に行程を遂行できました。その翌年、訪日した学生たちが、友愛からの派遣学生の案内の労を買ってくださったことに、お互いのために何かをしようという気持ちが通じたようで、深い感動を覚えました。2つ目は、友愛ユニオンの活動です。今や50名を数える大所帯となりました。ただ規模が拡大しただけでなく、友愛の新しい柱となる事業を生み出そうとする試みが始まっていることに大きな可能性を感じます。全国から集まった個性豊かな仲間た



2024年8月来日したOEJABの方々、揃って広島平和記念公園の慰霊塔に献花した。東京・広島・京都の12日間を、友愛ユニオンメンバーがアテンドして交流を図った。翌年のOEJAB訪問時、彼等が現地のアテンドを担当してくれた

ちと、どのような価値を創出できるのか、大きな期待を抱いています。友愛ユニオンの一員として、今後もその発展に微力ながら尽力してまいります。600号という節目が、友愛のさらなる飛躍の契機となることを心より祈念いたします。

連盟の思い出

飯高潤

元友愛青年連盟長岡支部

私の思い出として「友愛青年連盟」で約8年、東南アジア諸国の青年団体との相互交流などを行いました。連盟の新潟県長岡支部で、友好団体のグループの受入、また国際協力事業団JICAの委託事業「21世紀のための友情計画」も実施しました。「友愛」は早くから、自由で開かれたアジア太平洋を目指していたのではないかと、思います。

連盟の会長は、威一郎先生から邦夫先生となつて、文部大臣の時の邦夫先生の色紙「友愛」は今でも書斎に飾ってあります。後に邦夫先生のお別れの会にも参列しました。当時はほぼ毎月、地方から代表が上京し、都内からは多くの学生が集まっていました。友愛精神を説かれ

写真右/民主党結党を告げる「友愛」421号。由紀夫先生、邦夫先生の活躍の始まり写真左/鳩山邦夫先生の色紙。筆者の宝物



た一郎先生のご著書や冊子から、多くを学ばせてもらいました。軽井沢山荘での行事も盛んに行われました。関係者の皆様のご尽力によって、機関紙「友愛」がこれまで長く発行されてきたことは素晴らしい、大変うれしく思っています。旧民主党の結成を特集した記念号(1995年10月第421号)などは、懐かしいアーカイブの一つです。

長岡市は花火大会が有名ですが、花火は空襲に遭った歴史からの「平和への祈り」として打ち上げています。「友愛」も自由・平和・共生などを、活動のテーマとしてきたと思います。

日本が内外で困難な時代を迎えている今、財団の若い皆さんには、友愛精神を学び、その実践によって国や地域の発展に貢献できる人間になつて欲しい、と期待しています。

600号によせて

田中佐知子

鳩山友愛塾第一期修了生

機関紙「友愛」通刊600号記念、誠におめでとうございませう。

2008年、開講したばかりの鳩山友愛塾に第一期生として入塾させて頂いた。当時、塾長と塾長代行の御三方は、ご多忙を極めていらつしやつたと拝察するが、月に1度、塾生らが集う鳩山会館にお出まし下さつた。誰もが憧れる和子先生、由紀夫先生、邦夫先生がおそろいになる

と、学びの場がグッと引き締まりパツと華やいだ。塾では講義に耳を傾け、ダイナミックな学習テーマと向き合つた。終了後は御弁当でホッと一息ついたものだが、そこで語らつた同期生の中には、政治家になり国や地方の統治に携わっている方々がいる。私は市井の弁護士として、企業統治(コーポレートガバナンス)に携わらせて頂いている。あのころ

鳩山友愛塾で賜つた薫陶と出会いには、いまも変わらず感謝しており厚く御礼申し上げたい。こうして機関紙「友愛」600号を共に慶ぶご縁に巡り合わせた幸いは、とても有難く感謝の至りである。

友愛600号記念特集に寄せて

南埜幸信

公益財団法人友愛/理事・鳩山友愛塾第二期修了生

機関紙「友愛」600号発行、おめでとうございませう。機関紙友愛は、70周年の歴史を刻んできたということで、これは現在66歳の小生よりも大先輩の存在で、一貫してブレずに理念と信念を貫いて、多くの方を導いてこられたことに、改めて敬意を表します。

小生が友愛に感銘したのは、友愛とは「自然との共生」であるというこの理念です。農業や化学肥料という、本来自然界に存在しない化学物質を持ち込み、ひたすら人間の都合だけの経済合理性を追求してきた農業の本質を変えたいという思いで、大阪から上京し、東京の農学部に進んできましたが、当時は大学の研究

も、自然生態系を尊重した農業技術などはほとんどなく、むしろ天文学的な数の生物の存在である土そのものまで不要というところまで来ていた感がありました。

しかし、世界は環境と農業の問題から、確実に、生命の共生という自然界の本質から農業技術体系を構築していこうというパラダイム転換に動き出します。すべての生命が互いを尊重しあい、認め合い、共生していく社会には、「害虫」も「天敵」も存在しません。人間が自分たちの都合で勝手にレッテルを張って敵視するから、一部の虫が害虫化するのです。自然界はすべての生き物が共生するからこそ、すべての生き物の生存が担保されていく、生命の仕組みそのものです。

農業の世界にも友愛理念を実現する。これこそが、2050年までにオーガニック25%を掲げた、日本の「みどりの食料システム戦略」の基本政策だと考えています。

「友愛」の思い出

今野不二夫

元友愛青年連盟福島支部

私は福島支部に昭和47年から54年まで所属し、短期間であったが、充実した活動を行い、一言では言い尽くせない楽しい青春時代を送つた。思い出深い活動をピックアップすると、入会間もない昭和48年8月の「第20回全国リーダーズキャンプ」(添付写真)に参加をして、友愛の教えと歴史、優秀な先輩方々、全国の他支部活動等に目を見張つた。

福島支部活動の中でも、会員のアルバイト収入で支部事務所を設けたことや、毎月の支部新聞の発行、海外派遣活動に延べ10人を派遣したことが、品川支部との交流会を約6回実施したこと等、数えたらきりがな

機関紙『友愛』通巻600号記念特集 ～読者からの声～

えがあったからだ」と感謝している。渡邊幸憲さんからは「世界の平和は家庭の平和から」と「友愛の三原則」を教えられ、矢吹勝子さん(ドイツ在住)からは「社会参加」活動の大切さを教えられ、田中恭一さん、津久井(旧姓小林)トモ子さんとは宮城蔵王でプライベートを楽しんだ。岡本省三さんからは「言葉使いとスピーチ」の大切さを学んだ。ただ、渡邊さん、田中さん、津久井さんは鬼籍に入られ、岡本さんの連絡先が分からないのが寂しい。旧福島支部メンバーとは2〜3年毎に旧交を温めている。



福島支部／今野不二夫さんから送られてきた当時の活動の記録写真。「友愛政治連盟」の名がみえる。全国各地に支部があり、活発な活動を展開していた

機関紙『友愛』600号 によせて

公益財団法人友愛／評議員・友愛ユニオン
森崎桃子

この度は『友愛』600号の発刊、誠にありがとうございます。

友愛とのご縁は、2019年度にオーストリアの姉妹団体エヤップへ派遣頂いたことに始まります。派遣先で、様々な事情を抱えてオーストリアにやってきた少年たちや、エヤップで難民支援に携わる方々と実際に交流させて頂いたことは、大学で議論される社会問題を多角的に捉え

直す貴重な機会となりました。それ以来、ユニオンの同窓会等の交流の場や友愛の事業を通じて、様々な人生経験を待つ先輩方や各分野で活躍される同世代と出会い、国籍や世代を超えて多くの学びと気づきをいただいております。

今後とも様々な事業を通じて人々をつなぐ友愛のますますのご発展を心よりご祈念申し上げます。

AI時代の友愛は何処からきてどこに行くのか

西川伸起

公益財団法人友愛／理事・鳩山友愛塾第一期修了生

生成AIの日進月歩の進化が止まらない。このメッセージもAIに一言指示すれば、自分らしいテキストで、素敵な文章をもの数秒で書いてくれるのだが、最後の機会として？ 自力で書いてみようと思う。そんな我儘が出来るのも、友愛という概念に甘えているところでもある。では、友愛とは何か、は永遠の謎でもあり、時代とも変化してしめるべきものでもあるようにも思っている。最近では他人との関係性に軸足を置いているということが、他の思想や理念に比べて大いなる特異性であるようにも思ったりもする。自らは友愛についてディープラーニングの途上ではあるが、最近のエヤップ派遣生や留学生との交流で「おっ」となった彼女らの発言をいくつか書き留めてメッセージを終



友愛からの派遣員を、OEJAB派遣員として来日したメンバーがアテンドくださった。友愛理念は確実に伝わり広がっている

分断の時代における友愛の意義

井田安信

公益財団法人友愛／理事・鳩山友愛塾第一期修了生

成機関紙『友愛』創刊六百号、誠にありがとうございます。私が友愛に関わるようになったのは、2008年4月に友愛塾へ入塾したことが始まりでした。当時はイラク戦争の影響やサブプライム問題などにより世界経済が大きく揺らいでおり、現在の国際情勢と重なるものを感じます。自由貿易が平和につながると信じていた中で、今日の世界は安全保障を軸に再編され、米欧圏、中国圏、グローバルサウスといった複数の経済圏が並立し、ブロック化・多極化へと進んでいます。その現実には大きな不安を覚えます。自由貿易の前提である



理事会の様子。鳩山友愛塾修了生の理事が活躍、財団運営を引っ張ってしてくれる。左から山崎偉広理事、南楚幸信理事、井田安信理事、西川伸起理事、攪上哲夫理事



評議員会の様子。こちらでも鳩山友愛塾修了生が活躍、加えて友愛ユニオンメンバーからも評議員が誕生。友愛活動半世紀以上のベテラン評議員と共に、真摯な協議を展開

機関紙『友愛』600号 によせて

公益財団法人友愛／理事・元衆議院議員
小林正枝

この度、機関紙『友愛』が記念すべき600号を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

友愛の理念のもと、多くの学生が集い、新たな出会いや学びを通じて人間形成を深めていることに敬意を表します。

この機会に創刊号(昭和28年)を拝読いたしました。終戦から間もない時代背景を十分に理解することは容易ではありませんが、時代が移ろいの中にあっても不変であるべき価値があると感じました。それは、世界平和への希求と相互理解の大切さで

機関紙『友愛』600号 に寄せて

攪上哲夫

公益財団法人友愛／理事・鳩山友愛塾第二期修了生

昭和28年2月に創刊された機関紙『友愛』が、このたび600号を迎えました。長年にわたり編集・発行に携わってこられた諸先輩方のご尽力に、心より敬意と感謝を申し上げます。

『友愛』第18号から32号にかけては、全12回にわたり「友愛講座」わかりやすい友愛の解説」が掲載されました。これは「友愛について解説してほしい」という読者の要望に応え、当時の友愛青年同志会中央教育指導部がまとめたものです。「友愛」とは何か「友愛活動をいかに進めるか」について、体系的に示されています。

とりわけ第5回では、「友愛運動は人間の間の平和運動である」との視点から、世界平和は国家間の関係だけでなく、人と人との平和的共存によってもたらされると説かれていいます。今日の国際情勢を思うとき、その意義は一層重みを増していると感じます。

過去の紙面をひもとくことで、「友愛」の理念を改めて学ぶことができます。

通巻600号に寄せる メッセージ

山崎偉広

公益財団法人友愛／理事・鳩山友愛塾第一期修了生

通巻600号という記念すべき節目を迎えられましたことを、理事の一員として、また友愛塾1期生の一人として、心よりお慶び申し上げます。

これまで本財団の理念である友愛の活動を支えてこられた諸先輩方はじめ、多くの皆様のご尽力に深く敬意を表しますとともに、その歩みを次の世代へと繋いでいくことの大切さを改めて実感しております。

今後も友愛の理念のもと、本財団の活動や友愛塾を通じて学んだ人と人との繋がりを大切にしながら、微力ではございますが、本財団の発展に尽力してまいります。

機関紙『友愛』600号 によせて

海方 亨

公益財団法人友愛／監事

このたび、「友愛」が600号という大きな節目を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。長きにわたり発行を続けてこられた背景には、法人を運営されてこられた皆様、また編集に携わる皆さまの不断の努力があったことと思います。

『友愛』は創刊から今号までの間、友愛社会の実現を目指す団体の機関紙として情報を発信してこられたものと存じます。特に今日のような社会情勢や環境の下では、友愛の理念が必ずしも世の中に満たされていないように感じることがあります。このような状況だからこそ、友愛社会の実現に少しでも近づけるような活動とその情報を発信することに価値があるものと思われまます。個人的に

機関紙『友愛』通巻600号記念特集 ～読者からの声～



鳩山由紀夫理事長と初めてお会いした折りに撮影。対等に向き合ってくれたことに感激。緊張を超えて友愛を感じた瞬間でした。任 恒達さん(筆者写真左)

も、この『友愛』を通じて多くの気持ちや学びを得てきたと信じております。これからも、皆様の活動が紙面に反映され、友愛社会の実現へとつながることを願っています。最後になりますが、『友愛』のさらなる発展をお祈り申し上げます。

友愛を実感したひととき

任 恒達

二松学舎大学国際政治経済学部4年生

私は中国からの留学生で、大学生として中日文化交流のインターン活動に参加しております。先日、社長に同行してフォーラムに出席し、公益財団法人友愛理事長 鳩山由紀夫先生と同じ席で食事をさせていただきました。貴重な機会を頂戴いたしました。正直に申し上げて、最初は大変緊張しておりました。しかし勇気を出してお声がけすると、鳩山先生は私が学生であることや国籍、年齢にとらわれることなく、一人の人間として温かく接してくださいました。写真やサイン、名刺交換にも気さくに応じてくださり、目を見て丁寧な話を聞いてくださったことが強く印象に残っております。

その姿勢から、立場や世代を超えて人を尊重する「友愛」の精神を実感いたしました。友愛とは、相手と対等な心で向き合うことだと私は思



「友愛山荘」最後の宿泊客は、友愛ユニオンメンバー。燃えるモミジの下で、記念撮影。食堂で語り明かし、部屋で笑い転げ、友愛ユニオンの絆がより深まった「友愛山荘合宿」であった

います。今回の出会いを通して、その意味を深く理解することができました。私も将来、人と人とを友愛でつなぐ架け橋となるよう努力してまいりますと存じます。

人と人を結びつける「友愛」

手塚七彩

友愛ユニオン

機関紙『友愛』600号、おめでとうございます。いつも楽しく読ませてもらっています。

初めて友愛の事務所を訪れた際は、まだ学生でしたが、今では社会人6年目になりました。

日々の生活に追われていると目の前のことをこなすのに精一杯になってしまいがちですが、ユニオンをはじめ、友愛の皆さんにお会いすると、「明日は周りの人に感謝の気持ちを伝えてみようかな」「私ももう少しチャレンジしてみようかな」と、ちよつとだけ立ち止まって、他人とも自分とも向き合う気持ちになります。

年齢、学歴や職種など関係なく様々な話が出るコミュニケーションはあ



友愛ユニオンの活動を伝える「One Day」

まりないので、いつも刺激を受けています。友愛の精神が人と人を結びつけているのだと思います。私自身も、友愛ユニオンの一人として、人との繋がりを大切にしながら、社会に少しでも良い変化を生み出せる人間になれるよう努力していきたいです。この場をお借りして改めていつもお世話になっている皆さんに感謝を伝えたいです。

「友愛」とのご縁

劉幸宇

LXY国際交流研究所代表

私と「友愛」とのご縁は2015年に遡れます。同年、友愛国際写真コンクールに初投稿したことを契機に入会し、その後4回投稿しました。また、『友愛』に日中交流に関する記事を4本投稿してきました。その中に日中交流のシンボルである水運儀象台と日本蘇頌研究会会長吉澤大淳氏及び事務局長橋本清一氏に関する記事が連載されていました。

2019年、筆者と書家吉澤大淳氏が中国煙台市での中日国際書画學術研究会に出席し、日中友好交流を深めました。

さらに、2018年5月、友愛創立65周年記念大会開催時、私は膝リハビリ中に神戸・東京とんぼ返りで

参加しました。大盛況の会場で尊敬する鳩山由紀夫理事長にお目にかかり、歓談したことは今でも記憶に新しいです。

「友愛」は私の永遠の友です。今後も「友愛」の発展に微力を尽くしてまいります。

筆者(写真左)は、書家吉澤大淳氏(写真右)と中国煙台市での中日国際書画學術研究会に出席。日中友好の活動を続けている



「相互理解」が深まる瞬間の手応え

北島貴央

友愛ユニオン

機関紙『友愛』が通巻600号という輝かしい節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。長きにわたり深い理念を紡ぎ続けてこられた歩みに、深く敬意を表します。

私と友愛の縁はまだ数年ほどですが、韓国での小論文コンテストや日本語学校での交流など、海外の若い世代と真剣に議論を交わした経験は私のかげがえのない財産です。対話を通じて「相互理解」が深まる瞬間の手応えは、社会人となった今でも鮮やかな記憶として残っています。

また、2023年のオーストラリア派遣から始まった仲間との繋がりは、今や互いに切磋琢磨し合える大きな支えとなりました。多様な舞台で活躍する同世代と、立場を超えて語り合える環境の尊さを、日々改めて実感しています。

これからも友愛の心を大切に、自分自身の歩みを一歩ずつ進めていければと思います。また活動の場でお会いできる日を楽しみに、貴財団のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

『友愛』600号に寄せて

近藤昭一

前衆議院議員

1953年の創刊以来、平和と友愛の理念を掲げ続けてきた本紙が、通刊600号という大きな節目を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。

鳩山由紀夫元総理が掲げられた「友愛」の精神―人と人、国と国が互いを尊重し、共に生きるという理念―に、私は深く共鳴してきました。分断や対立が深まる今の時代だからこそ、この理念はより一層輝きを増しているように感じます。財団の活動に参加する機会が多くありませんが、友愛の一員であるという誇りと思い胸に、環境、平和、共生を軸とした政治活動を続けてまいります。

これからも「友愛」の火が次世代へと受け継がれ、人々の心をつなぎ、平和な社会の礎となることを心から願っています。600号、誠にありがとうございます。

台湾で感じる友愛の心

橋 颯太郎

友愛ユニオン

機関紙『友愛』600号発行、おめでとうございます。

私は台湾現地の企業で仕事をして暮らしていますが、こちらに来て1年が経ちましたが、台湾は少数・異文化に寛容なところだと感じます。

それは雰囲気だけでなく、16族ある原住民の文化を残すための優遇制度や、同性婚を認めた法律があることにも表れています。言語面では主に中国語と台湾語の2言語が話されています。一つ上の世代には、中国語と台湾語の両方を流暢に話す方が当たり前になります。両者は全く違う言葉ですが、それらを混ぜて話す様子は日本人である私にとっては特別に感じます。

このように、言語・民族が混在している台湾は、異文化に触れる機会が自然と多いでしょう。まるで友愛ユニオンの集りのように、各人が個性的で優れていて、その上でお互いを認め、助け合っている、正に「相互尊重・相互理解・相互扶助」の友愛理念の体現のような所です。外国人の私を特別な目で見ることなく、対等な眼差しで向き合ってくれる台湾の雰囲気はとて心地向かいやすいです。インフラなど、日本に比べて不便なことは多いですが、相互扶助の精神や、人の温かさを日常で感じられる住みやすい所だと感じています。



流暢な中国語を強みに台湾で活躍。友愛ユニオンメンバーの台湾案内人? 橋 颯太郎さん

思い出

松沼 茂

「松しん」代表

午年生まれの小生今年84歳、100年時代の昨今、80代などまだまだ若造ですが、日ごろの撫順生で、動くだけで息切れの老駄馬、しかし若い頃は、重いリックで山野を闊歩

機関紙『友愛』通巻600号記念特集 ～読者からの声～

し、また御幼少のみぎりは、貧乏農家の次男として、すくすくと本人よりは家業の稲を育て奉った。上京後の下宿が縁で文京区で「松しん」を創業、何とか営業しつつ、「鳩山邦夫後援会及び友愛」に所属、邦夫先生の手植え・鎌取りの米つくりを、故郷古河市で兄の松沼憲治と共に、先生の家族・秘書達と実践、昔風の稲作は地元で大変な評判だった。平成・令和の米騒動で当時の米つくりが懐かしく蘇った。稲作は単に主食のコメを生産するだけでなく、水田は小魚や水生昆虫やトンボをはぐくみ、日本の自然を守り、また渡り鳥の貴重な休憩地でも有る事はあまり知られていない。私及び妻智性子は鳩山事務所及び友愛を通じて貴重な体験や交友が出来ました。

ありがとうございます「鳩山事務所・友愛」
お目出とう 機関紙『友愛』600号



「松しん」こと松沼茂さんからご提供いただいた貴重な写真。前列右から二番目、邦夫先生がランニング姿で、嬉しそうな様子で収まっています。「自然との共生」理念と実践で賞された

600号発行おめでと うございます

小西健斗
公益財団法人友愛/評議員・
鳩山友愛塾第一期生修了生

通刊600号という節目を迎えられたことに心より敬意を表し、このような節目に執筆の機会を頂きました

たことに感謝申し上げます。
私は平成20年に開講された鳩山友愛塾の一期生として、友愛の理念と、それを世界に広めていく必要性を学んできました。それから20年近くの年月が経ち、新しい青年たちが活動している様子を、機関紙『友愛』を通して楽しく拝読しております。様々な形で皆様活躍されているなか、私も私にできる活動を頑張っています。

増々優しさが失われているこの世界情勢においても、友愛の信念は確かに継承されており、それが重要であることは通刊600号を迎えている本誌の歩みが証明しています。引き続きこの歩みを記録し、次代へと志を手渡す灯であり続けることを願っております。

国際交流の素晴らしさ

島崎照代

元日本友愛青年協会評議員

Bとの交流が継続していること、機関紙『友愛』の報告をとっても楽しく拝読させて頂いています。
友愛の更なる発展と益々の国際交流が続きますように郷里高知よりお祈りいたしております。

「フラタニティ・未来への挑戦」

田中正基

公益財団法人友愛/評議員
鳩山友愛塾第二期修了生



音楽家の登壇門として活躍した「友愛ドイツ歌曲(リート)コンクール」。現在も(公財)世界文化遺産財団によって続けられている。OEJABとの交流にも大いに貢献した(旧奏楽堂にて)

私は1978年ウィーン留学から帰国後、OEJABのお客様の通訳で当時の「友愛青年連盟」とのご縁ができました。その後友愛練馬支部が誕生し支部主催の「ドイツ歌曲コンクール」を行いました。1990年には、友愛関係者の方々の多大なご理解と温かいご支援で「日本友愛青年協会」(現公益財団法人友愛)主催の第1回「友愛ドイツ歌曲(リート)コンクール」が行われ、2015年まで継続開催できました事、心より感謝申し上げます。どれ程多くの声楽家が、ここから羽ばたいて行ったことでしょうか。OEJABのご協力を頂き、コンクールの副賞として1991年より1位入賞の声楽家がウィーンで公演するという声楽家の夢の実現にも繋がりました。

今も若い優秀な方達が派遣員としてオーストリアを訪問し、OEJAB

機関紙『友愛』が創刊600号という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。昭和28年の創設以来、一貫して友愛の精神を伝え続けてこられた諸先輩方の情熱と、読者の皆様のご支援に深く敬意を表します。第一號の(1)には笑顔の鳩山一郎先生の写真と「発刊の言葉」があり、受け継がれている理念がうかがえます。(HPから)

鳩山一郎先生が提唱された「友愛(フラタニティ)」は、自立した個人が互いを尊重し、助け合う共生の理念です。混迷を極める現代社会において、この思想の重要性はかつてないほど高まっていると思います。経済格差や紛争、環境問題などといっ

た困難に立ち向かうため、私たちは今こそこの普遍的な価値を再確認し、次世代へと繋いでいかなければなりません。

評議員として、私はこの600号を「過去の継承」から「未来への挑戦」への出発点と捉えています。多様性を認め合い、誰もが尊厳を持って生きられる社会の実現に向け、友愛の輪を世界へ、そして未来へと広げていく決意です。これからの平和な世界を信じ、共に歩みを進めてまいります。



2009年に「鳩山友愛塾」第二期がスタート、個性溢れる面々。二期生からも公益財団法人友愛の理事・評議員を排出している

*皆さまの声に登場する「友愛」の活動(OEJAB派遣・受入事業、友愛小論文コンテスト事業、友愛ドイツ歌曲コンクール等)は、公益財団法人友愛のホームページに詳しい活動内容を掲載しております。
是非ホームページをご覧ください。

<https://yuai-love.com>



友愛創立70周年記念DVD

機関紙『友愛』創刊号から収録
動画で綴る70年「未来につなぐ」
70周年記念楽曲「希望の道」(演奏)

お申込方法

電話・ファックス・メール・郵便など何でも結構です。

電話：03-5684-3188
FAX：03-5684-3186
メール：yuai-i@yuai-love.com
住所：112-0014 文京区小石川1-10-13

友愛事務局までお申込ください。

会員：送料/1,000円
会員以外：送料/3,000円

*今回お申込いただいた方には、機関紙『友愛』600号までのデータを収録したCDを併せてお送りします。

公益財団法人 友愛

友愛創立70周年記念DVD PC専用

1 友愛データベース
年表・活動記録・機関紙『友愛』関連資料

年表 1953年～2023年	専攻で綴る活動記録 2000年～2023年	機関紙『友愛』 創刊号～54号	資料 友愛関係者ご挨拶状
-------------------	--------------------------	--------------------	-----------------

2 映像で綴る友愛70年の軌跡「未来につなぐ」

3 創立70周年記念楽曲「希望の道」 作曲・演奏 渡邊康雄

発行：公益財団法人 友愛
編集・制作：① 友愛編集部・株式会社出版文化社
② 上垣庸貴・鈴木真太郎
③ 作曲・演奏/渡邊康雄
監 修：① 川手正一郎 ② 戸澤英典
発行年月日：2024年3月31日

特別付録 DVDプレーヤー用Disk

② 映像で綴る友愛70年の軌跡『未来につなぐ』
③ 創立70周年記念楽曲『希望の道』

特別付録 DVDプレーヤー専用
公益財団法人 友愛

友愛創立70周年記念

① 友愛データベース
年表
活動記録
機関紙『友愛』
関連資料

② 映像で綴る友愛70年の軌跡
『未来につなぐ』

③ 創立70周年記念楽曲
『希望の道』

公益財団法人 友愛
PC専用Disc

特別付録

映像で綴る友愛70年の軌跡
『未来につなぐ』

創立70周年記念楽曲
『希望の道』

DVDプレーヤー専用
公益財団法人 友愛



ザルツブルクへの電車。シュニッツェルで挟んだバーガー(左筆者)



ウィーンといえばウィーン会議！
我ながら名監督かもしれません



駅のスーパーにて。壁一面がソーセージで驚き



ボランティアのホフマンさんと聖シュテファン大聖堂前で

「クリムト大好き」渡辺さんの事前解説のおかげで倍以上感動

多様性と伝統の街・ウィーン

伊藤 里彩
大阪大学 4年

今回のオーストリア訪問では、OEJABの職業訓練校や老人ホームに加え、国連ウィーン事務局やオーストリア議会などさまざまな場所を訪問する機会を得ました。私にとっては初めてのヨーロッパであり、これまで訪れてきたアジアの国々とは大きく異なる風景や経験から多くの刺激を受けました。



2025年度OEJAB派遣員：左から土屋京香さん、森澤菜由さん、豊田万葉さん、伊藤里彩さん、渡辺咲耶さん、田口郁子さん、唐祺東さん、佐藤廉太郎さん(国連機関建物前にて)

2025年度OEJAB派遣事業 OEJAB派遣員報告

8人の視線紹介

2026年3月5日(木)～3月16日(月)
OEJAB運営施設・国連機関・オーストリア外務省
日本大使館など訪問

2025年度の派遣員は総勢8名、過去最大の人数です。そして今回の8名は、特に個性豊かな顔ぶれが揃いました。OEJABの担当者ニツクさんによると、「一番騒がしく、一番行動的だった」とのこと。どんな世界を見てきたのでしょうか。本人撮影の写真と共にご紹介します。(掲載五十音順)

政治と人権の

葛藤の中で

佐藤 廉太郎
国際教養大学 2年

うな気がいたしました。派遣で学んだことはここには書ききれないほど多く、間違いなく一生忘れられない経験をえました。最後になりましたが、温かく迎えてくださったOEJABの皆様、この派遣を企画してくださった友愛の皆様、そして同期の皆に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

OEJABが運営する教育・職業訓練施設や、連邦首相府を訪問し、オーストリアの社会統合への努力を肌で感じたとともに、日本が目指すべき移民・難民政策の在り方のヒントを得た。

OEJAB関連機関では、難民への言語教育と職業訓練が並行して行われ、指導者が生徒に対し、とてもフレンドリーに接しているのが印象的だった。連邦首相府の方々は、統合政策における「Gardern und for Deut(支援と要求)」の姿勢について語ってくれた。た

OEJABで電気工事を学んでいた男性は「いずればシリアに残されている家族とウィーンに住みたいのが、目処はたっていない」と語った。そんな中でも、今回出会った人々は、共生や社会的統合に将来の希望を見出し、各々の役割を全うしており、私もそこに「人間の安全保障」と「国家の安全保障」の両立の可能性を感じた。彼らの努力



国連でニツクの友人お二人とお会いしました。(左端筆者)



ザルツブルク城からの景色は時間を忘れるほど綺麗でした！



豚をクレイブソースで煮たシュバイネブラーテン、柔らかで旨い！

だ彼らを受け入れるだけでなく、「彼らのポテンシャル(可能性)を活かす」支援や教育を行うことで自立を促す。連邦制や地理的要因、申請者の出身地など、日本と異なる点も多く、一様に応用できるものではないが、移民や難民を単なる支援の対象としてではなく、新たな社会を創るための一員として捉えるスタンスには、見習うべきものがある。しかし同時に、家族呼び寄せの停止やGEAS(Common European Asylum System: 難民申請手続きの効率化を目的とした新枠組み)の施行、極右政党の台頭など、移住希望者への向かい風が強まるのも感じた。OEJABで電気工事を学んでいた男性は「いずればシリアに残されている家族とウィーンに住みたいのが、目処はたっていない」と語った。そんな中でも、今回出会った人々は、共生や社会的統合に将来の希望を見出し、各々の役割を全うしており、私もそこに「人間の安全保障」と「国家の安全保障」の両立の可能性を感じた。彼らの努力

で、移民・難民問題を学んでいる身として、彼らのような人々を支えつつ、平和と秩序ある社会づくりに貢献したいと改めて実感した。他にも、国連事務局の訪問、美術館・博物館巡り、音楽鑑賞、美しく歴史ある街並みと建築の数々など、オーストリアでしか経験できないイベントが目白押しだった。そして何より、同期七名の派遣員と過ごした日々は、かけがえのない思い出となった。帝国の食文化に翻弄されつつも、個性豊かで和気藹々としていたメンバーは、それぞれの関心領域に深く精通しており、彼らとの会話からはたくさん学びを得た。また、同行してくださった戸澤先生や、ニツクをはじめとする現地でお会った方々、そして全ての友愛関係者の方々にも感謝申し上げます。

今回の研修訪問で得た学びや、出会った人々との関わりは、その場での一時的な刺激に留まらず、私の価値観や人生設計にも大きく影響を及ぼす経験となりました。派遣前の意気込みにも記した通り、ここでの知

故郷の料理に思いを馳せ遠くを見る団長(唐祺東さん/写真右)&イケてる戸澤先生(写真左)



飛び入りで国連の会議に参加。ガブリエルにオフィスや大講場も見せてもらって感動



自然博物館隕石シミュレータ。10kmの隕石で欧州が吹き飛びました!



見を糧に、今後も勉学・実務に励んでいく所存です。ここには書ききれないほどまだまだ多くの思い出がありますが、改めて皆様へ感謝の意を示し、報告といたします。

出会いが、広げ 深めた10日間

田口 郁子
東北大学 2年

今回のウィーン研修は、こうして思い返しながら文章を書こうとしてもどこから書き始めればよいか迷ってしまうほど、学びに満ちた10日間でした。

その中で最も印象に残っているのは、人の温かさ、特に、私たちのような外国



ホーブルク宮殿。双頭の鷲の飾り、迫力満点でした(筆者)



訪れたレストランでお土産を渡したら、ビールジョッキをいただきました



楽友協会の立ち席は素敵なホール。お手頃価格で音楽好きには幸せな空間でした



OEJABの職業訓練施設でガラス加工に挑戦。やってみると大苦戦



街中の茶道用品店に大興奮。茶道や抹茶は現地でも大人気です

際には、外国人の私たちに温かく接してくれて、多様な人々を社会の一員として受け入れてくれる様子も見られました。大学の授業で学んだ、オーストリアの歴史的多文化・多民族社会である側面について、研修を通して体感し、理解を深めることができました。

さらに、参加した他のメンバーとの関わりも大きな学びとなりました。10日間を共に過ごす中で、専門分野や進路、今までの経験など、さまざまなことを話しました。また、メンバーの皆さんは自分の関心や専門に関わる話題になると生き生きとした様子で解説してくれたり、ウクライナ戦争

シュテファン大聖堂の塔の上から見る夜景は格別!



「語れる」分野を持てるようさらに学びを深め、それを積極的に行動に移していきたいと考えています。最後に、本研修を共にしたメンバーの皆さん、現地で大変お世話になったニックをはじめとするOEJABの皆様、そして本研修を支えてくださった友愛の皆様、心より感謝申し上げます。この経験を必ずや今後の学びや活動に活かしていきたいと思えます。

出会いが変えてくれたもの

土屋 京香
東京外国語大学 4年

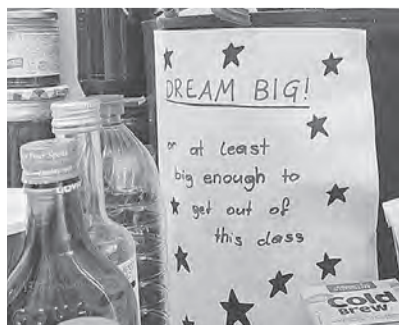
派遣中に私が最も心を動かされたのは、出会った方々一人ひとりの「情熱」と「使命感」です。慣れないオーストリアでの生活に自分や子育てに対する自信



連日案内してくれた方々も一緒に別れパーティー(写真前列右から二人目筆者)



毎晩解散前にみんなで明日の予定や集合時間を確認



OEJABの教育施設には学生向けに前向きな言葉が沢山飾られています

加えて、「優しさ」や「強さ」とは何かを改めて考える機会となりました。例えばOEJABの寮では、基本的なルールや誓約書があり、場合によっては退去が求められます。多様性がマインナスではなくプラスなものとなるよう、OEJABの職員には高い創造力と専門性が求められています。OEJABの方々の言葉や

が揺らいでも強く明るく生きるウクライナ出身のお母さん、母国イランが戦火にある中でも未来の平和のために取り組むCTBTの職員、それまで十分な支援が届かなかった自国の若者や難民のために自分ができることを尽くすOEJABの職員。それぞれが自分なりの人生の意義をもちながら、お互いに尊重し、助け合う環境がとても印象的でした。これは渡航前に自分が問いとして掲げた「Syn pathy」を大切にしたい社会の一つの形だと考えます。同時に、濃密なスケジューリングを共に過ごした同期の仲間が自然に、そして意識的に作っていたものでもありました。

姿から、一定の厳しさが誰かを守ることに学ばしめた。また、OEJABで出会った学生達も誰かが真剣に学んでおり、目が合うと優しく微笑んでくれました。困難を抱えながらも将来に向けて前向きに頑張る姿に、私も力をもらいました。難民の受け入れに関しても、オーストリア連邦首相府はあえて教育と就業に焦点を絞ることで最大限の効果を生もうとしています。このように、現実や課題と向き合っているからこそ生まれ、創り出される各々の「優しさ」と「強さ」も貴重な学びの一つです。



ザルツブルクで、自由に話しながら歩く散策の時間



歴史ある大観覧車に乗れたのもとってもいい思い出です



この写真を見るとウィーンの空気に包まれた気分になります

社会を実現するために大切にしたい姿勢を発見する機会となりました。そして「友愛」は自然と芽生えるものではなく、一人ひとりの意識と行動によって実るものであると実感しました。

あつという間の10日間でしたが、その一日一日にかけがえない学びと思い出が詰まっています。自分の考え方や、夢との向き合い方に変化があったことが、その何よりの証拠です。そのような経験を学生生活の最後に得られたこと、そしてプログラムの実現に関わってくださったすべての人への感謝を忘れず、オーストリアでの日々を未来に繋げていきたいと思えます。

「移民」と「食文化」から ウィーンを見る

唐祺東
京都大学 4年

日本人の食卓に、移民の文化が進出していることは間違いない。一時ブームになったマレータンなど「ガチ中華」、ネパール人が売る「インドカレー」など、異国の味は日本で日常化している。

今回の派遣の旅ではOEJABの支援を受けているウクライナ難民や中東出身者の方々に出会え、移民政策担当の官僚にお話を伺う機会を持つことができた。同時に、様々なオーストリア料理も堪能できた。旅のキーワードとして「移民」と「美食」を挙げられよう。滞在中、支援や同化政策の客体ではない移民の姿、食文化を知るため、移民系



みんなでホイリゲ。帝都の庶民文化で、酒蔵が新酒を提供



ウィーン大近く。教会とハラル料理店が並ぶ街並み



西駅に並ぶ中華、タイ、トルコ料理のお店。手軽で安い食事のイメージだろうか



ザルツブルクの司教座教会。彫刻を黒色で縁取るヒンドウー寺院でも見られる意匠



国連で食べたグリーンカレー。辛さは別ぞえのチリソースで調整可能



ベルヴェデーレ宮殿から見える建物。白黒にすると銅版画みたい

違いを受容し 認め合うこと

豊田 万葉
広島大学修士 2年

オーストリアでの10日間は、すべてが新鮮で学びにあふれた濃密な滞在となりました。この10日間の中で、現地の人には当然化している小さな異文化をたくさん見つけることができました。小さな異文化の中に、オーストリアの文化の基盤があるように感じられ、改めて現地に赴き、五感で感じることの重要性を実感しました。

私は今回の研修では、多文化と平和の2観点を重点に置き各所を訪問しました。その中で、印象に残ったことが二つあります。一つ目は、難民の方がオーストリアに住み続けたいと感じていたことです。エ

ヤップの施設の一つである職業専門学校に訪問した際、シリアから来られた方とお話させていただきました。オーストリアに来た理由を尋ねると、「ここは自由で、自分のしたいことができる」とおっしゃっていました。単身で来ているにも関わらず、前向きな気持ちでおられる姿を見て、自

国でなくても安心して過ごせる環境があるというのはとても重要なことだと感じました。二つ目は、平和都市、広島との役割です。日本大使館を訪れた際、平和都市としての広島との役割について尋ねたところ、「若者が伝え続けること」が必要だと答えていただきました



ウィーン大学を訪問。大学とは思えない豪華な造り(筆者)



着いた翌朝の朝食。ハム、チーズの種類も多く、ウィナーは絶品



町の至る所に設置されているタバコの吸い殻専用のゴミ箱



OEJABの教育施設訪問。寮や学校など多くの施設を見学



電車内に張られているマーク。犬は口を覆って乗車と書かれている



た。ウィーンの国連本部を訪問した際にCTBTTOで核実験の監視や検証に尽力している方々の取り組みを、実際に目の当たりにし、平和を伝える重要性をさらに実感しました。今回の訪問で私は、広島で生まれ育った身として、平和の大切さを伝承していくべきだと思いました。

私は今回の研修を通して、友愛は「違いを受容し認め合う」ことなのではないかと感じました。現地を訪れて様々な方と出会う中で、一人一人が異なる考えや信念を持っていると感じ、個人に焦点を向けることの重要性を感じました。それはこの派遣で一様に訪れた8人のメンバーにも言



友愛派遣員をアテンドしてくださったのは、2024年来日したOEJABの派遣員の方々だった。友愛のリレー、伝承の証といえる

えることであり、同じ日本に住む大学生ではありませんが、各々の観点が異なっており、そのおかげで滞在中様々な場面で多角的な視点で考えることができました。違いを受容し認め合うことが視野を広げ、お互いを理解し尊重することにつながるのではないかと感じました。

最後になりましたが、友愛事務局の皆様、ニツクさんをはじめオーストリア現地でお世話をしてくださった皆様、大変貴重な経験をさせていただき、本当にあ

りがとうございました。これからもこの経験を活かし、平和な世界を実現する一助となるべく、これからも努力をしていきたいと思

刺激的だった10日間

森澤 茉由
大阪大学 3年

今回の経験を通じて、多くのことを学び、国際機関で人の命のために働きたいという思いを一層強めた。特に印象的だったのは、日本と比較した社会問題に対する意識の高さだ。

一つ目は環境問題への意識である。環境保護を重視する政党が国会で一定の議席を占めており、人々の関心の高さがうかがえた。さらに、ベジタリアンの多さやBIO(オーガニック食品)と表示された商品の普及から、環境への配慮が日常生活にも浸透していることを実感した。

二つ目は社会的支援に対する意識である。難民には教育・雇用・住居が提供され、社会全体で支える姿勢が見られた。政府レベルで支援体制が整備されており、派遣先のOEJABは大規模に支援を展開し、難民や社会的弱者に対して実践的な支援を行っていた。

このように、社会問題への意識は単なる関心にとどまらず、各自の行動として具体的に表れている点に驚かされた。この姿勢は医療



国連機関の集まるビル群の前で。世界の広さを実感！(筆者)

対しても多様な感想が生まれた。例えば、難民施設への視察において、私は難民の医療サービスへの

最後に、この8人で過ごした10日間は、かけがえのないものとなった。自由奔放な私たちが温かく導いてくださったニック、全力でサポートしてくださった理事の皆様、そして何より、このような貴重な機会を与



国連の食堂に常設のこのコーナーがあり、日本食の人気を実感！



電車で前の方と話が盛り上がり、友愛手拭いを渡すとお菓子をくださった



大好きなニック！10日間ありがとう



おいしいランチ。オーストリア料理は一皿が大きい



ウクライナ避難民の方と。手作りの伝統的ケーキは美味しかった！

生きづらさに寄り添う場

渡辺 咲耶
富山大学 4年

まず初めに、私たち8人をOEJAB派遣員として受け入れ、帰国までの全てのプログラムの運営に、ご尽力くださったOEJAB関係者の皆様、そして友愛事務局の皆様、心より感謝申し上げます。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

さて、私は派遣前の抱負文において、「文化芸術と対話を通じて平和な共生社会を創造する力を養う」という大きな目標を掲げていました。帰国後に改めて振り返ると、非常に密度の濃い10日間の研修を通じて、その目標に大きく近づくことができた実感しています。

今回の研修を通じて私が見出した、平和な共生社会実現への一つの答えは、



2025年度派遣員8人のとっておきの笑顔。全員がこの写真を最高の一枚に選んでいた。-背景の万国旗を飛び越え世界に羽ばたけ！-

「目の前の一人の生きづらさに寄り添う場をつくること」です。

OEJABの教育施設訪問では、私の専門分野であるアートの授業を見学させていただきました。担当の先生にアート教育の価値について伺ったところ、「成績や単位、評価にとらわれないで、子どもたちがありのままの自分を表現し、自らを見つめる場となることに、アート教育の意義がある」とお話ししてくださいました。人々の心をケアし、自己理解を深めるアートの唯一無二の役割を再認識する機会となりました。また、その先生はアートセラピーを専門とされており、私自身もこの分野をさらに深く学びたいという新たな目標を得られた、大切な出会いとなりました。

さらに、OEJABの職業訓練施設訪問では、イランから難民として来られた方とお話しをする機会がありました。彼らと対話を重ねる中で、次第に心づながりを実感するようになりました。以前の私は、「難民」という言葉から「支援を必要とする人々」という画一的なイメージを持っていたのですが、実際に現地に出会ったのは、「困難な状況の中でも力強く前向きに生きる人々」でした。私の中で「難民」という言葉は一人ひとりの具体的な顔を持つ存在へと変化し、彼らを単に「難民」と呼ぶことに強く違和感を抱くようになりまし。また、職業訓練施設も、単に「人を助ける場」ではなく、「人に寄



ウィーンといえば！シュニッツェルとワイン！美味しかったです！



相席だったアートギャラリーのオーナーから展示のお誘いをいただきました！



最も好きな画家クリムトの、最も好きな作品と一緒に！(筆者)

り添い、その人らしい生き方を支える場」としての、ぬくもりを強く感じました。一見すると些細に見えるこれらの言葉や認識の変化こそが、現地でしか得ることのできない貴重な学びの核であったと感じています。今後は本研修で得た学

びを基に、一人でも多くの人々の生きづらさに寄り添い、他者とのつながりを創出しながら、平和な社会の担い手となるよう、日々努めてまいります。.....所属大学・学年は派遣当時に記載しております



OEJABの教育施設で見学したアートクラスの様子



戦禍を逃れ、ウクライナから来られた方の貴重なお話をお伺いできました

